「平成30年度『学びのスタンダード』推進事業」の推進地域の取組

パイロット校名	喜多方市立第二中学校、喜多方市立第一小学校
推進協力校名	喜多方市立松山小学校、喜多方市立上三宮小学校

「授業スタンダード」を活用した授業改善への取組み

喜多方市では、喜多方市立第二中学校（パイロット校Ⅰ）、喜多方市立第一小学校（パイロット校Ⅱ）、喜多方市立松山小学校、喜多方市立上三宮小学校（推進協力校）の４校が、学びのスタンダード推進事業に取り組んできた。

それぞれ現職教育及び研究公開を通して授業改善と指導力向上に取り組み、その成果を発表してきた。「学びのスタンダード」推進事業も２年目となり、いずれの学校においても、「授業スタンダード」を研究のベースに置きながら、より一層授業改善に取り組むことができた。

１　パイロット校の取組内容

（１）喜多方市立第二中学校

①　「タテ持ち」の実施

ア　所属学年と他学年の授業を担当することとし、教科の実態に合わせて、数学科は３学年、英語科、社会科は２学年にわたるタテ持ちを実施した。

	1組	2組	3組	4組
1年	A先生	A先生	B先生	C先生
2年	C先生	C先生	A先生	B先生
3年	B先生	B先生	A先生	C先生

※数学科の３学年にわたるタテ持ち体制

②　「授業スタンダード」と「家庭学習スタンダード」を活用した授業づくり

ア　生徒の興味・関心を高め、「問い」や「思い・願い」を引き出す授業の導入の工夫を図った。また、授業と家庭学習との連動を図ることを心がけた。

（２）喜多方市立第一小学校

①　教科担任制の実施

ア　４教科のうち、理科と外国語活動を「学びのスタンダード」推進事業による教科担任制と位置づけた。特に、外国語活動は要請訪問や公開研究会などで研究授業を重ねることを心がけた。

	理科	外国語活動	家庭科	図画工作科
５学年	研修主任	５－２担任	５－３担任	５－１担任
６学年	教務主任	６－２担任	６－１担任	

※４教科による教科担任制

※教材研究の様子

（ア）教材研究の工夫

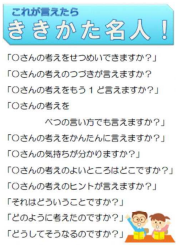
放課後の時間を使い、導入の仕方や有効な教材などの共有化を図った。

（イ）理科通信の発行

授業通信を発行し、子供達の発言を他の学級とも共有して学び合いを深めた。

②　「授業スタンダード」の自校化による活用

昨年度の研究の反省として学び合いのコーディネートが課題になったため、「授業スタンダード」の「はたらきかけ・問い返しの例」を「ききかた名人」として整理し、各教室に掲示することで意識化を図った。



2　推進協力校の取組内容

（１）喜多方市立松山小学校

①　「授業スタンダード」の視点に立った授業改善とチェックシートの活用

ア　視点１　「問い」や「思い・願い」を引き出す工夫（「授業スタンダード」導入）

（ア）身につけさせたい力を明確にした単元構成（単元のゴール設定）

（イ）知的好奇心を高める課題の提示

イ　視点２　対話的な学びの工夫（「授業スタンダード」展開）

（ア）自分の思いや考えをもたせる場の工夫（考えの形成）

（イ）目的を明確にした「対話の場」の設定（グループ・ペア）

（ウ）子ども同士をつなぐ思考過程の共有化（可視化・教師のコーディネート）

ウ　視点３　学びを深める振り返りやまとめの工夫（「授業スタンダード」終末）

（ア）思考の流れを振り返る場の工夫

（イ）新たな学びを促す工夫

（ウ）学びの連続性を図る工夫

思考共有化・教師のコーディネート

（２）喜多方市立上三宮小学校

①　「授業スタンダード」の視点に立った授業改善とチェックシートの活用

ア　視点１　追究・解決するための計画・見通しの持たせ方の工夫

（「授業スタンダード」導入）

（ア）児童の問いを引き出す課題の設定、効果的な課題提示の在り方

（イ）課題解決までの計画・見通しの持たせ方の工夫

イ　視点２　筋道を立てて表現するための工夫（「授業スタンダード」展開①）

（ア）自分の思いや考えを伝える方法を考えさせる支援の工夫

（イ）学習形態の工夫（グループ・ペア）

ウ　視点３　対話的な学び合いをするための工夫

（「授業スタンダード」展開②）

（ア）学び合いの場の設定

（イ）教師のコーディネートの工夫

※対話的な学び合いの場

３　成果と次年度へ向けて

【成果】

＜パイロット校＞

（１）研究授業や教科部会における「授業スタンダード」の活用についての協議を通して、指導法を学ぶよい機会となった。特に若手教員の授業力の向上がみられ、授業のまとめの時間を十分に確保することができた。

（２）授業で使用するワークシートや動画資料などを共有することで、教材研究の時間短縮を図ることができた。

（３）「授業スタンダード」を軸とした授業づくりを通して、生徒の教材に対する関心意欲が高まったり、授業外（家庭学習も含む）の生活の中で、新たな学びに出合ったりする生徒が増えた。

（４）教科担任制を実施した外国語活動においては、担当者３名で一緒に研修を深めることにより、それを全学級に波及することができた。

（５）教科担任制により１つの学級の学びが他の学級にも活かされ、より深い学びへと導くことができた（パイロット校Ⅱ）。

（６）各担任が何らかの教科で同学年の他の学級の授業をすることになり、学年全体で、子どもを多面的に捉えることができた。（パイロット校Ⅱ）

（７）「授業スタンダード」の活用を図ることにより、教師主導にならず、児童生徒の発言をつないでいく意識を高く保つことができた。

＜推進協力校＞

（１）「授業スタンダード」の視点に立った授業改善とチェックシートの活用を行うことにより、指導内容の重点化を図ることが日常的に行えるようになってきた。

【次年度に向けて】

＜パイロット校＞

（１）タテ持ちの教科については、担当時数が多くなり、教材研究を深める時間を設定できないこともあった。次年度は、少人数学級による指導体制から標準学級による指導体制へ移行することやＴＴ指導の導入等により、よりタテ持ちの効果が高められる体制を構築し、深い学びを実現していきたい。

（２）教科担任制については、時間割設定が難しい場面もあったため、児童の実態に応じて指導体制の見直しも検討していきたい。

（３）「授業スタンダード」の活用に関して、教師だけでなく、児童生徒の学び方として意識化を図っていきたい。

＜推進協力校＞

（１）複式学級になる学校においては、児童同士が学び合える環境の工夫を心がけていく。